様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　１月２８日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20820070
研究課題名（和文）　近世後期日本語逆接条件表現に関する記述的研究

研究課題名（英文）　A Study of the Adversative Expression in Colloquial Japanese during the Latter Part of Edo Period

研究代表者
宮内　佐夜香（MIYAUCHI　Sayaka）
国立国語研究所・コーパス開発センター・プロジェクト特別研究員
研究者番号：30508502

研究成果の概要（和文）：本研究課題では，近世後期（江戸時代後期）の話し言葉の逆接条件表現について取り扱い，特に上方語における逆接確定条件表現の実態を調査・記述することに目的を置いた。この調査結果を，研究代表者がこれまで行なってきた近世後期の江戸語の逆接条件表現に関する研究結果と対照することによって，それぞれの方言の特有の現象が抽出され，さらに両方言に共通する特徴も抽出されたことで，近世日本語の時代的特徴が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to study the adversative expressions of colloquial Japanese during the latter part of Edo period. It especially aimed to investigate the actual situation of those expressions used in the KAMIGATA region. This result was compared with those expressions used in the Edo region which has been studied by the writer. The results clarified the own particular phenomenon of each dialect. In addition, the finding of the common features between these two dialects revealed the characteristics of the adversative expression which is specific to the latter part of Edo period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	760,000	228,000	988,000
2009 年度	350,000	105,000	455,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,110,000	333,000	1,443,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：日本語学
キーワード：日本語史・文法・条件表現

１．研究開始当初の背景

日本語の条件表現研究には順接条件表現を中心に多くの先行の研究成果があり，逆接条件表現についても，近世前期頃までの上方語の様相が明らかにされている。また応募者は近世後期以降の江戸語・東京語の逆接条件表現に関して研究を行ってきた。本研究課題において近世後期の上方語を調査・研究することにより，条件表現史研究の未着手の時代が埋まることになる。また，先行の研究成果との比較対象を行うことができるようになることで，日本語条件表現史の全体像の解明，さらに現代日本語に見られる文法的特徴の史的背景の解明に利する成果が得られる。

２．研究の目的

(1)近世後期の話し言葉の逆接条件表現について取り扱い，特にこれまでの研究で未着手であった上方語における逆接条件表現の実態を調査・記述する。

(2)研究代表者がこれまでに行った同時代江戸語の逆接条件表現の研究結果と対照することで，それぞれの方言の特有の現象と，同時に両方言に共通する近世後期の時代的なものと思われる特徴を抽出する。

３．研究の方法

(1)用例の採取

近世後期の小説の１ジャンルでまとまった作品量のある上方洒落本を中心の資料として調査を行い，逆接条件表現全体の用例を採取する。さらに近世末期の上方語を反映する貴重な資料である『穴さがし心の内そと』（以下『穴さがし』）から用例を採取する。これにより近世後期の初頭と末期の様相の比較を行えるようにした。また、国語研究所において研究代表者が開発に関わっている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して、近世後期と比較対照するための現代語の用例収集を行なった。

(2)データベース化

用例文に一律の情報（話者情報・原本における所在情報）を付与して電子化した。

(3)データベースを使用した用例分析

完成したデータベースを使用して，上方語の特に代表的形式である「が」「けれど」類「ど(も)」について頻度調査，形態の分析，機能の分析を行い，分析結果と考察を記述した。現代語については機能の分析を行った。

(4)江戸語の対照

上記(3)の上方語の調査・考察結果と，江戸語の同様の調査・考察結果の対照を行い，それぞれの方言の特徴を抽出した。またそれぞれの方言の共通点を確認し，当該時代の逆接条件表現の時代特有の現象として位置付けた。その際に現代語の調査結果を比較対照として参照した。

４．研究成果

(1)使用比率の観察

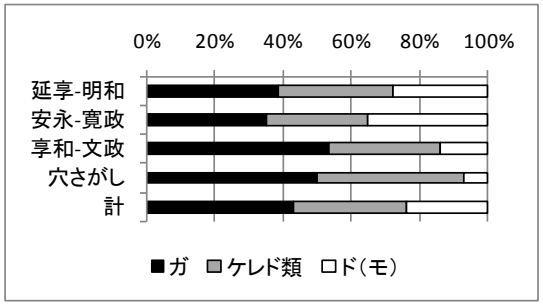
①上方語における使用比率

現代の京阪方言においてはケレド類の〈ケド〉が主に用いられるが，近世後期においてはどの形式が多く用いられているかを明らかにするために，近世後期上方語の逆接の機能を持つガ・ケレド類・ド(モ)の使用比率を確認した。結果を表１，図１に示す。表の上３段が上方洒落本の時代区分，４段目が『穴さがし』である（以下の図・表においても同じ表示)。

表１：上方語ガ・ケレド類・ド(モ)用例数

年代区分	ガ	ケレド類	ド(モ)	計
1746-71 延享-明和	21	18	15	54
1779-00 安永-寛政	77	66	77	220
1804-27 享和-文政	79	48	20	147
穴さがし 1864頃	35	30	5	70
計	212	162	117	491

図１：上方語ガ・ケレド類・ド(モ)使用比率



洒落本内の３形式の中でケレド類に明確な増加は見られないが，全体としてケレド類・ド(モ)のセットが優勢であり，ガの使用率の方が低い傾向がある。ケレド類とド(モ)を比較すると，【延享-明和】【安永-寛政】でド

(モ)とケレド類にあまり差がないのに対して，【享和-文政】ではド(モ)の使用率が低くケレド類が優勢となっており，この時期ド(モ)との対立においてはケレド類の増加が確認された。そして『穴さがし』に至ってド(モ)が明らかに減少し，ケレド類の増加が確認された。

上方語のガ・ケレド類・ド(モ)の用例を下記に示す（以下，用例には作品名を付す)。

a 花情さんに。正月五日出てくれなんせといふてやつたが。まだ何とも返事なんせん程に。おまへも。そふいふて。くれなんせ。（月花余情）
b そりやわたしじやとてこれをもらうにも。たいていのからくりをしたことじやないけれど。おまへゆへとおもへば。なんともおもはんわいな（北川蜆殻）
c アイ金さへ戻せば何んにもいふ事はなけれども其金の工面は出来ずじや（南遊記）

②使用比率の江戸語との比較

上記①で明らかになった上方語のガ・ケレド類・ド(モ)の使用比率を，同様に調査した江戸語のものと比較した。図２に江戸語のガ・ケレド類・ド(モ)の使用比率を示した。

図２：江戸語ガ・ケレド類・ド(モ)使用比率

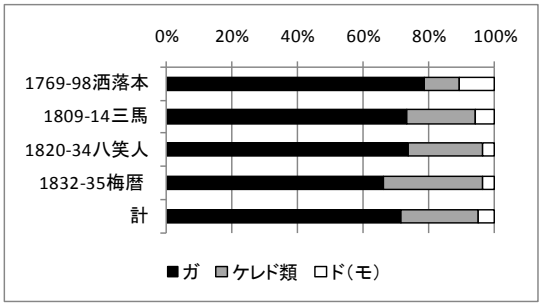


図１，２を比較すると，江戸語においてもケレド類の漸増が認められるが，上方語の方がケレド類の使用率が高く，上方語でケレド類・ド(モ)が優勢なのに対して，江戸語資料では明らかにガの優勢が認められる。ケレド類とド(モ)の比率を見ると，上方洒落本にド(モ)の優勢が見られるのに対して，江戸語資料では洒落本の段階ですでにド(モ)の使用率が低い。上方語は旧形態のド(モ)が時代を下っても残存している点が特徴的であると言える。

(2)ケレド類の形態のバリエーションの変化

①上方語のケレド類の形態

ケレド類としてまとめた中には，〈ケレド〉〈ケレドモ〉〈ケド〉等〈ケレドモ〉を元としたバリエーションが含まれている。その分布を文中・文末に分けて確認すると，表２，表３のようになる。これを特に縮約形の〈ケド〉の出現に注目して確認する。上方洒落本中には，文中の〈ケド〉の用例は見られず，文末用法の例が，文政期に一例見られるのみである。しかし幕末の『穴さがし』になると，文中の〈ケド〉の例が現れる。用例を示す。

d 色事もしよまいもんでもなひけどあんな者とハあんまりじゃなひか。（穴さがし）

表２：上方語の文中のケレド類の形態

年代区分	ケレド	ケレドモ	ケド
1746-71 延享-明和	21	3	-
1779-00 安永-寛政	59	41	-
1804-27 享和-文政	48	1	-
穴さがし 1864頃	26	-	4
計	154	45	4

表３：上方語の文末のケレド類の形態

年代区分	ケレド	ケレドモ	ケド
1746-71 延享-明和	-	-	-
1779-00 安永-寛政	4	1	-
1804-27 享和-文政	5	-	1
穴さがし 1864頃	-	-	-
計	9	1	1

上方語において近世後期の間に，ケレド類の形態に〈ケド〉が増加しつつあるという傾向が得られた。

②ケレド類の形態の江戸語との比較

ケレド類のバリエーションについて上方語と江戸語との比較を行った。江戸語のケレド類の形態の分布を表４に示す。

表４：江戸語の文中のケレド類の形態

	洒落	三馬	八	七	梅暦	有人
ケド	-	-	-	-	-	-
ケレド	8	81	45	48	95	12
ケレドモ	4	-	3	-	5	82
計	12	81	48	48	100	94

上方語と同じく近世後期の初頭から幕末にかけての調査だが，江戸語には〈ケド〉は１例も現れなかった（文末も同様)。このことから，江戸語に比べて上方語の方が〈ケド〉の発達が早かったと考えられる。

(3)接続助詞としての機能の分析

①機能分類

ガ・ケレド類の接続助詞としての機能を，逆接的な意味が強いか否かで次のように分類した。

【逆接】

前件から予測される事態と後件が矛盾する，または前件と後件の内容が対比的なもの

e 寝よふといふけれどあれがなぶりものにして居てなんぼでもねさせぬ（郭中奇譚）

【注釈・断り】

前件内容が後件の発話という行動自体の注釈や断りとなっているもの。

f いやみじやないけれど。そのしやうこは。とかくそちらへよりじやもの（短華藥葉）

【提示】

前件に何らかの話題を示し，後件にそれについての説明やそれに関係する事柄を述べるもの。

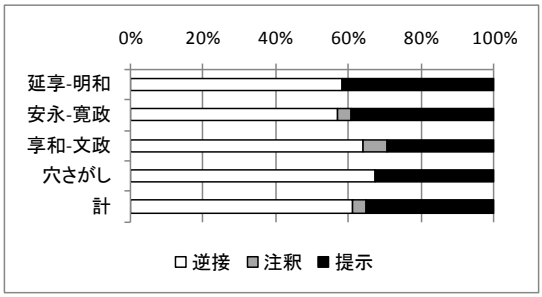
g あの子はわしが友達じやがどふで是からこゝへもちよこゝ来るであろふ（当世粋の曙）

②ガ・ケレド類・ド(モ)の機能比率

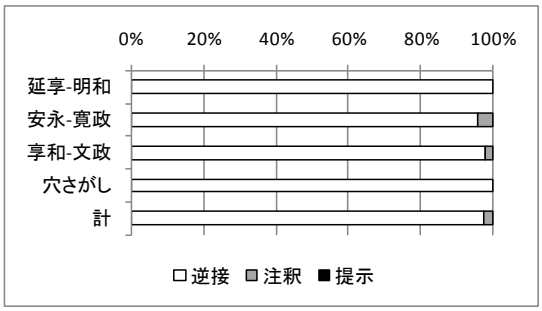
上方語のガ・ケレド類・ド(モ)の機能を①に示したような基準で分類した。図３にその比率，表５に用例数を示す。

図３：機能の出現比率

ガ



ケレド類



ド(モ)

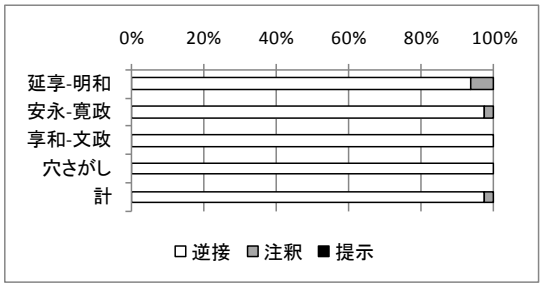


表５：機能別用例数

ガ

年代区分	逆接	注釈	提示	計
1746-71 延享-明和	21	0	15	36
1779-00 安永-寛政	77	5	53	135
1804-27 享和-文政	79	8	36	123
穴さがし 1864頃	35	0	17	52
計	212	13	121	346

ケレド類

年代区分	逆接	注釈	提示	計
1746-71 延享-明和	18	0	0	18
1779-00 安永-寛政	66	3	0	69
1804-27 享和-文政	48	1	0	49
穴さがし 1864頃	30	0	0	30
計	162	4	0	166

ド(モ)

年代区分	逆接	注釈	提示	計
1746-71 延享-明和	15	1	0	16
1779-00 安永-寛政	77	2	0	79
1804-27 享和-文政	20	0	0	20
穴さがし 1864頃	5	0	0	
計	117	3	0	120

この分析結果から，ガには提示用法が近世後期を通じて 40%程度の一定の割合で見られることが分かる。対して，ケレド類，ド(モ)には【逆接】及び逆接的な【注釈・断り】の用例のみが見られ，【提示】の用例は見られなかった。

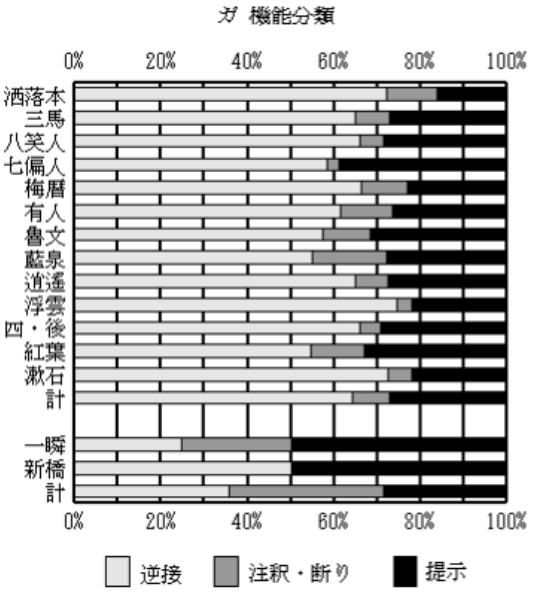
③機能の江戸語との比較

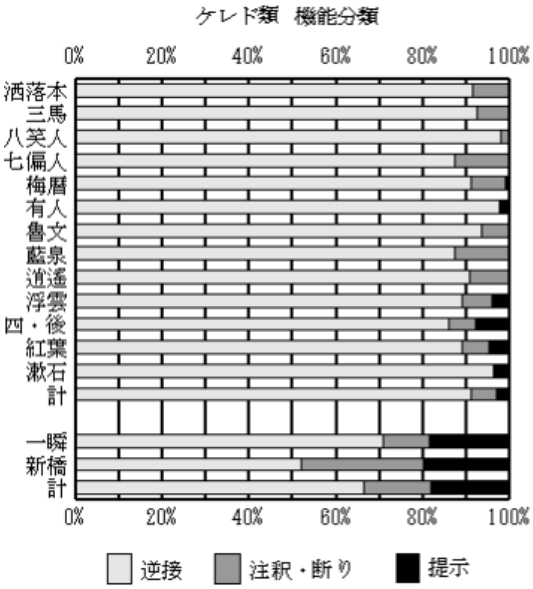
機能について，江戸語と上方語の比較を行

った。江戸語から明治期，及び一部現代小説（図４の一瞬・新橋）のガ・ケレド類の用例を機能分類した結果を図４に示す。図４の【有人】までが近世後期資料である。

上方語と江戸語の分析結果を比較すると，上方語資料・江戸語資料ともに，ガに【提示】が一定の割合で現れるのに対して，ケレド類やド(モ)に【提示】はほぼ現れないという，同様の傾向であることが分かる。

図４：江戸語の機能分類



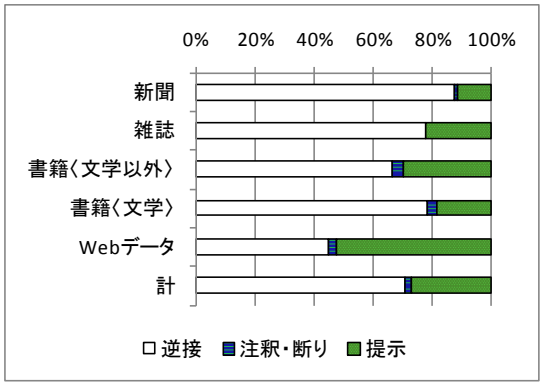


④現代共通語のガ・ケレド類

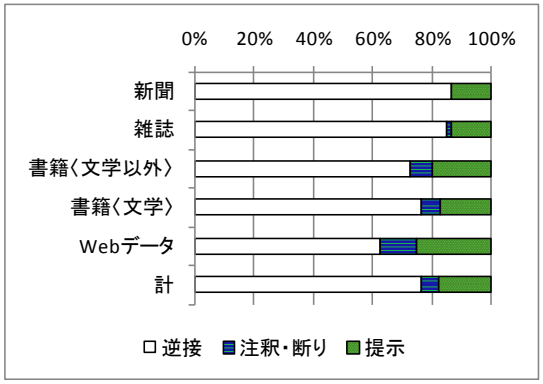
近世後期以降の変化の方向性を捉えるために、現代日本語のガとケレド類がどのような機能で用いられているのか、内省によらない客観的な指標を得るため、現代共通語の資料に対して調査を行った。その結果を図５に示す。

図５：現代日本語の機能分類

ガ



ケレド類



これを見ると、江戸語ではほぼ見られず、明治期でも 10%に満たなかったケレド類の【提示】が，現代共通語ではガより少ない傾向はあるが、各資料で 20%程度の一定の割合で現れており、差異が見られる。

(4)総括

以上(1)～(3)に述べてきた結果について，当該研究分野における位置付けと今後の展望を述べる。

①各方言特有の現象

各形式の使用比率に方言ごとの差異が明らかになった。江戸語，上方語ともに時代が下るに連れてケレド類の増加が認められるが，江戸語に対して，上方語の方がケレド類の使用率が高い点が特徴的であり，ケレド類の発達は上方語の方が早かったものと思われる。また，上方語においては，ド(モ)が近世後期まで勢力を保っており，江戸語ほどガの隆盛が見られない。江戸語ではガ→ケレド類という変化が見られたが，上方語ではド(モ)→ケレド類という移行が認められるのではないか。

以上から，上方語には旧形態のド(モ)の残存と，後継形式のケレド類の早い発達が特徴として指摘され，江戸語では，歴史的に新しいガの優勢が特徴的であると言える。今後，他の文法事項に関する各方言の特徴においてこれに類する現象が認められないかを検討し，大きく各方言の持つ傾向としての位置付けを試みたい。

また，このような上方語におけるケレド類の使用頻度の高さは，縮約形の〈ケド〉の用例が上方語の方が早く現れるようになったこととの関連が考えられる。この結果は言語一般における，形態の縮約の発生と頻度の関連を示す１例として，位置付けられるものと考える。

②共通する時代的特徴

一方，機能に関しては，江戸語と上方語との間に差異は確認されなかった。江戸語・上方語ともに，ケレド類の逆接的ではない用法の発達は見られず，ケレド類は前形式のド(モ)の機能を受け継いで，当該時期においては逆接専用形式としての役割を保っていたものと思われる。

現代共通語を対照とした機能に関する調査によって、現代共通語のケレド類が一般に【提示】で用いられていることが分かっている。このことから、近世後期に逆接専用を保っていたケレド類に、現代日本語に至るまでに変化が起こったと言える

縮約形の〈ケド〉の発生に使用頻度の関連が示唆されるように，機能変化の背景としてもより使用頻度の高い環境において変化が促進される，ということが文法変化一般において予測される。また、形態が縮約されるという現象も、文法機能の変化に関連することも考えられる。そこから，明治以降の上方語において，江戸語よりも早くケレド類に【提示】の機能が増加する，という一つの予測が挙げられる。

ただし，もう一点考えるべきは，接続表現全体における【提示】という表現そのものの位置付けである。近世後期以降現代語に至るまでに，談話において（またはそれを模した文章表現において）このような表現が用いられるか否か，という表現自体の変化があった可能性がある。そのように見れば，近世後期においてはそもそも話題提示の表現が現代語に比べて未発達であるということも考えられるわけである。

本研究で取り扱った形態の機能の問題は，接続表現そのものの変化の問題として考えるべき側面も有していると言える。

こうした現代語に向かう大局的変化の中で，近世後期の逆接条件表現の実態がいかに位置付けられるかを明らかにするために，今後明治以降の時代を下っての調査を試みたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 宮内　佐夜香，通時的変化を背景とした接続助詞ガとケレド類の機能についての調査―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として―, 都大論究, 47, 2010, pp.(1)-(15)，査読有り

〔学会発表〕（計１件）

①□宮内　佐夜香，近世上方語における接続助詞ケレド類について　―洒落本を資料として―，近代語学会，2008/12/13，白百合女子大学

６．研究組織

(1)研究代表者

宮内　佐夜香（MIYAUCHI　Sayaka）
国立国語研究所・コーパス開発センター・プロジェクト特別研究員
研究者番号：30508502